

書き言葉における 談話と文法の一考察

—項の形式・文法関係・意味の相互関係から

久好孝子

◆要旨

文法研究において談話との相互関係を明らかにすることは重要な課題である。本稿では、一まとまりの意味を持つ書き言葉のテキストにおいて、その基本になる節がどのような形式・文法関係・意味で構成されているかを考察した。その際、詳細なアノテーションを行った独自のコーパスを使用し、形式・文法関係・意味を包括的に分析した。その結果、(1) これまで話し言葉にのみに適応可能とされてきた「単一語彙項の制約」が書き言葉においても有効に機能していること、(2) 1節内に複数の項が要求される構文において、項の形式と文法関係と意味に統計的な相関関係を確認し、談話を支えるコード化を提示した。

◆キーワード

単一語彙項の制約、項の形式、文法関係、項の意味、二項述語構文

◆ABSTRACT

In grammatical research, revealing relationships between grammar and discourse is an essential subject. This paper, which aims at the distribution of argument information in successive clauses in written Japanese, examines how the arguments are realized in terms of forms, grammatical relations and semantic roles. This examination, which is based on an original corpus with detailed annotations, provides a comprehensive analysis of these. As a statistically significant result, the following two findings are presented: (1) the availability of "One Lexical Argument Constraint" even in written texts, which has been only applicable to spoken texts, and (2) a preferred coding system of two-argument sentence constructions in discourse which is discovered when investigating the correlation among forms, grammatical relations and semantic roles.

◆KEY WORDS

One Lexical Argument Constraint, forms of arguments, grammatical relations, semantic roles of arguments, two-argument constructions

A Study of the Interaction
between Discourse and Grammar
in Written Japanese Texts
An observation on argument realization in terms of
forms, grammatical relations and semantic roles
TAKAKO HISAYOSHI

1 はじめに

日本語研究において、文法と談話の相互作用が注目をあつめている（久野 1978, 久野 1983, Kuno 1987）。砂川（2005）では、談話の展開と文法的な形式の機能を説明するため、主題が展開する際使われる名詞の種類やコピュラ文・分裂文などの文法に着目し、文法と談話の相互作用に着目する重要性を示唆している。本論では、この文法と談話の相互作用の重要性に着目しつつ、砂川（2005）では二次的にとり扱われている文法に主眼を置き、談話を文法側から再考していく。

Comrie (1989) は、文法関係から談話の構造にアプローチした研究であり、本論もこれに従うとともに、そこに意味要素を加えた分析を行う。具体的には、(1) のような一まとまりの談話を対象に、それを構成している節の項に形式・文法関係・意味のアノテーションを加えた独自のコーパスを作成し、それを基に量的分析と質的分析を行う^[注1]。

- (1) S1 [CL1 車内には本間と同年輩の背広姿の 男性-が 目立つ]
S, Ani, Lex
- S2 [CL1 φ 商用で出かけて行くサラリーマンだろう]
(S, Ani)
- S3 [CL1 φ これ-を 見ても]
(A, Ani) O, Dem
- [CL2 [REL 日中の新幹線-が 東京という商都の血管である]-こと-が
S, InA, Lex -S, Nom
-わかるというものだ]
- S4 [CL1 [REL 斜めの道の通路ぎわのシートにもたれている]-若者-が
A, Ani, Lex
携帯電話-を 耳に あて さかんに何かしゃべっている
O, InA, Lex 『火車』

以上のようにアノテーションを行ったコーパスを基に、談話を構成する節の項がどのような形式・文法関係・意味で出現するかを詳しく調べ、その傾向を確認する。

本論は、2節でコーパスの概要を説明し、3節で項の形式・文法関係の結果、さらに4節で二項述語の構文の項の形式・文法関係・意味の相関を示し、最後にまとめとして、書き言葉で好まれるコード化の提言を行う。

2 コーパス

本論は量的分析を重視するため、分析対象のテキスト量の選定が重要となる。一作品すべてを対象とするか、それとも一部分を取り出して分析するかという問題であるが、本論は後者の部分抽出を用いた。部分的抽出の場合、データの偏りという問題点がある。一部分の抽出ではデータ全体を反映していないのではないかという問題がそれで、このような偏りに対する対処策として「代表性」(representativeness) という概念がある。1つの作品で2,000語から5,000語程度のまとまった分量を扱うことでその作品の代表性を表すことができるといわれており (Kennedy 1998: 69)、本研究でもこの代表性という概念を援用し、6作品中のある程度まとまった分量の言語資料を部分的に抽出し分析を行った^[注2]。

本論では表1のとおり、6作品から4,000字程度取り出し、1,837節の項にアノテーションを行った^[注3]。

表1 4,000字抽出データの第1項省略の頻度

形式	土居J		堺屋J		井伏J		大江J		宮部J		角田J	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	160	56.1%	131	49.2%	219	62.6%	156	55.9%	211	63.0%	168	52.2%
語彙	57	20.0%	114	42.9%	106	30.3%	85	30.5%	98	29.3%	126	39.1%
その他	68	23.9%	21	7.9%	25	7.1%	38	13.6%	26	7.8%	28	8.7%
合計	285	100.0%	266	92.1%	350	100.0%	279	100.0%	335	100.0%	322	100.0%

3 項の形式と文法関係

第2節のデータを対象に(1)で示したアノテーションを行う際、一項述語の主語(S)、二項述語の主語(A)にはその内部が均一でないことに注意を払いながら分類した^[注4]。

例えば、(2a)(2b)のような場合も「ヲ格」標示の名詞句を同じ節内に持つが、一項述語の主語とし、(2c)の第2節のように「ニ格」標示の名詞句を持つ場合も二項述語の主語とした。また、(2d)のような受動態の場合は一項述語の主語として分類している。

- (2) a. $[_{CL1} \phi_i$ 大きく息を 吸いながら]
 $[_{CL2}$ 葵_i-は 部屋-を うろつきまわった]
 S, 3, Ani, Lex (角田)
- b. $[_{CL1}$ 私_i-は 階段-を 上がって行き]
 S, 1, PRO
 $[_{CL2}$ ϕ_i 寝室に 入って行ったのだ]
 (大江)
- c. $[_{CL1}$ ϕ_i なかなか 駅員-に 会え-ない-ので]
 (A, Ani) O, Ani, Lex
 $[_{CL2}$ ϕ_i 暗がりのなかで 知らない男と 暫く 立ちばなしをした]
 (井伏)
- d. S1 [本間の所属している班の連中が頻繁に利用している居酒屋に高校を出てアルバイトで勤め始めた女の子_i-が一人いる]
 S2 [同年代の子供を持っているおっさん連中ばかりが常連客だから
 ϕ_i みんなにかわいがられていた]
 (dS, 3, Ani) (宮部)

以上の方法でアノテーションを行い、項の分類を試みた。その際、代名詞(PRO)については、1) 1人称・2人称は対象外とする^[注5]、2) 3人称代名詞は「語彙」名詞に分類する、という処理を行っている^[注6]。表2が分類結果である。

表2 文法関係と形式の相関

文法関係 形式	A		S/dS		O		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
省略	452	70.1%	368	41.6%	114	17.7%	934	42.9%
語彙	179	27.8%	427	48.2%	404	62.6%	1010	46.4%
その他 ^[注7]	14	2.2%	90	10.2%	127	19.7%	231	10.6%
合計	645	100.0%	885	100.0%	645	100.0%	2175	100.0%

$$\chi^2=385.927, pf=4, p<.01$$

表2が示すように、項の形式と文法関係にはカイ2乗検定で有意差が認められた。さらに、残差分析を行ったところ表3の結果が得られた。

表3 残差分析の結果

	A	S/dS	O
省略	16.599 ▲	-1.062 n.s.	-15.457 ▽
語彙	-11.345 ▽	1.403 n.s.	9.835 ▲
その他	-8.305 ▽	-0.566 n.s.	8.913 ▲

▽: 有意に少ない, ▲: 有意に多い, $p<.01$

項が1つだけ要求される一項述語の場合(S/dS)、省略と語彙やその他の形式の間に弁別的な差は見受けられず、語彙の意味と音声形式をあわせ持つ項として現れるか否かというものさしは機能していると言い難い。一項述語では指示対象の具現化/非具現化という情報提示は有益な方略ではないと考えられる。しかし、項が2つ以上要求される構文に注目すると、Oは具現化される傾向が強く、残差分析の結果でもわかるように語彙名詞とその他のカテゴリーが有意に多い。これは有意に多い「省略のA」と著しく対立している。二項述語では、具現化/非具現化という方略が機能していることは明白であり、具現化を一手に引き受けているのがOであることがわかる。

この結果は、Du Bois (1987) がいう「単一語彙項の制約」が有効に機能していることを示していると考えられる。単一語彙項の制約とは、サカプルテック

マヤ語 (Sacapultec Maya) の話し言葉の談話を計量分析した結果に帰結した制約である (Du Bois 1987)。談話のなかで自動詞の主語 (S)、他動詞の主語 (A)、目的 (O) の位置にどのような形式の名詞句が生起しているかを計量分析し、1つの節内で語彙の名詞句として現れる項の数はゼロか1が基本で、節1つに対して語彙項が2つ以上出現することは回避されることが示され、さらに、語彙化された項は新情報を担う傾向が高い、という文法的側面と語用論的側面の相互関係を明示した制約である。これまでこの「単一語彙項の制約」は話し言葉のみで適応できるとされていたが、本研究の分析から、日本語の場合、書き言葉においてもその有用性が確認できた。

4 二項述語構文の項情報の相関

第3節では、節1つに対して語彙項は1つの傾向が高いことを見たが、特に二項述語の項の形式と文法関係 (AとO) に相補的關係が確認できた。それに加え、各項の意味要素を加え、それぞれの関係を分析してみた。その結果が表4である。

これは機能語的特徴の強い名詞化辞等を除いた、省略項・語彙項・代名詞項の3つの形式と文法関係 (A,O)、意味的要因の関係を示したものである。

「A」「O」「省略」「語彙」「代名詞」「有生」「無生」のそれぞれを組み合わせ

表4 他動詞の項の形式と意味

文法関係	文法関係		O													
	意味	形式	有生						無生						合計	
			省略		語彙		代名詞		省略		語彙					
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合				
A	有生	省略	13	2.6%	15	3.0%	4	0.8%	65	12.8%	226	44.7%	323	63.8%		
		語彙	5	1.0%	4	0.8%	0	0.0%	22	4.3%	78	15.4%	109	21.5%		
	無生	省略	0	0.0%	1	0.2%	2	0.4%	5	1.0%	43	8.5%	51	10.1%		
		語彙	0	0.0%	1	0.2%	0	0.0%	2	0.4%	20	4.0%	23	4.5%		
合計			18	3.6%	21	4.2%	6	1.2%	94	18.6%	367	72.5%	506	100.0%		

た場合、「第1項・A・語彙・無生」+「第2項・O・省略・有生」で談話内に現れる頻度は極めて少なく、本研究のデータでは確認できなかった。一方、「第1項・A・省略・有生」+「第2項・O・語彙・無生」の組み合わせは、最も頻度が高く226例にも上る。そのような頻度の高い組み合わせには(3)のS1CL1からS3CL3まで複数連続して現れる場合も観察された。

- (3) S1_[CL1] おいおいここじゃここじゃ-と ϕ_i 声-を
(A, 3, Ani) O, InA Lex
かけながら渡ったが]
[CL2 背負っているリュックサックの始末には 二人_i-とも 手を焼いた]
S2_[CL1] ϕ_i 頭-を 下げると]
(A, 3, Ani) O, InA, Lex
[CL2 ずしりとリュックサック_j-が首や頭を押し]
[CL3 ϕ_i 背中-を 水平にして]
(A, 3, Ani) O, InA, Lex
[CL4 ϕ_i 這って行くと][CL5 ϕ_j 脇腹か腋の下へ 廻る]
S3_[CL1] そのつど ϕ_i 平衡-を 失って]
(A, 3, Ani) O, InA, Lex
[CL2 体が揺れるので]
[CL3 はっとばかりに ϕ_i レール-をしっかりと 握る]
(A, 3, Ani) O, InA, Lex (井伏)

項が2つ以上要求される場合、項のコード化は、「第1項・A・省略・有生」+「第2項・O・語彙・無生」の組み合わせの頻度が圧倒的に高く、出現頻度を示した表4の左下から右上への大きくバイアスがかかっている。談話内のどの位置(第1項か第2項か)にどのような意味情報(有生か否か)をどのような形式(省略か語彙か)を用いて表現するか、という表現の仕方・方略は恣意的なものではなく、ある一定の偏り、つまり大きな制限がかかっていると考えられる。

5 まとめ

ある一定のまとまりをもったテキストを対象に、節内の項がどのような情報をもって現れているかを見てきた。具体的には、項の形式・文法関係・意味がどのような関係を維持しながら談話を構成しているかを確認した。

その結果、図1のような構成が考えられる。

「A」は省略・有生の傾向が強く、それと対称的に「O」は語彙形式・無生の傾向が強い。「S」と「dS」は類似しており、「A」と「O」の中間的な振る舞いを示す。この中間的な振る舞いを中心に、「A」に傾くと省略(白抜き)・有生の傾向が強く、「O」に傾くと語彙形式・無生に傾く。談話内の項・名詞句を、形式・文法関係・有生性に着目して検証すると、それぞれの要因が相互に関連し合い、談話を構成していると考えられる。

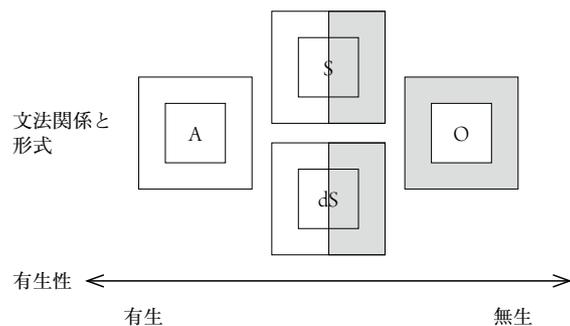


図1 項の形式・文法関係・意味

〈国際医療福祉大学〉

注

[注1] …… アノテーションの意味は以下の通りである。

S: 一項述語の主語	A: 二項述語の主語	O: 目的語
dS: 受動態の主語	1: 一人称	3: 三人称
φ: 省略項	Ani: 有生名詞	InA: 無生名詞
Lex: 語彙名詞	Dem: 指示詞	PRO: 代名詞
S(1): 文	CL: 節	Nom: 名詞化辞

[注2] …… 6作品は、土居健郎(1980)『甘えの構造』弘文堂、堺屋太一(ジャイルズマリー訳)(2003)『日本を創った12人: 対訳』講談社インターナショナル、井伏鱒二(1995)『黒い雨』新潮社、大江健三郎(1995)『静かな生活』講談社、宮部みゆき(1998)『火車』新潮社、角田光代(2004)『対岸の彼女』。以下、出典元は、それぞれ「土居」「堺屋」「井伏」「大江」「宮部」「角田」と表記する。

[注3] …… 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は、代表性を保障する分量として、1作品につき1,000文字の抽出サンプルを用いている(丸山2009)。このことから1作品につき4,000文字の抽出データというのは、決して少ない分量ではないと考えられる。

[注4] …… Hopper & Thompson(1980)で述べられているように、出来事の参加者の数、動作性、意図性、相などの特徴を総合的にみて他動性(transitivity)を決定すべきではあるが、いわゆる「一項述語」の第1項を「S」、「二項・三項述語」の第1項を「A」と分類した。

[注5] …… 日本語は「pro-drop 言語」で1・2人称の代名詞は具現化されないことがデフォルトであるという考え方を考慮し、1・2人称の第1項は母数から除いた。

[注6] …… 田窪(2010: 207-222)では日本語の3人称代名詞は固有名詞に近い性質を持っていることが指摘されている。

[注7] …… 準体助詞や形式名詞において語彙の意味がどれくらい残存しているかを考慮した詳細な分類が必要と思われるが、ここでは以下の「の」のように名詞化辞に相当する場合(堀江・ブラシャント2009)は、音声形式はあるが語彙名詞とは分類せず「その他」に分類した。表3も同様である。

シゲ子と矢須子は千田町の焼跡へ行ったとき 青い木の葉が松の木の根元に散っている -の- を 見たそうだ (井伏)

参考文献

- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
 久野暲(1983)『新日本文法研究』大修館書店
 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点』くろしお出版
 田窪行則(2010)『日本語の構造—推論と知識管理』くろしお出版
 堀江薫・ブラシャントパルデシ(2009)『言語のタイポロジー』研究社
 丸山岳彦(2009)「作文の文体情報—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から見えるもの」

『日本語教育』 140, pp.26–36.

Comrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology* (2nd ed.). Oxford: Blackwell.

Du Bois, J. W. (1987) The discourse basis of ergativity. *Language*, 63(4), pp.805–855.

Hopper, P. J., & Thompson, S. A. (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language*, 56, pp.251–299.

Kennedy, G. (1998) *An Introduction to Corpus linguistics*. London: Longman.

Kuno, S. (1987) *Functional syntax: Anaphora, Discourse, and Empathy*. Chicago/London: University of Chicago Press.
